

江戸時代の
最新メディア

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。

道徳心

物語から社会ルールを学ぶ
今も昔も変わらない光景

子どもの行動範囲が広がり、お友だちや近所の人々と接するようになると、あいさつをすることや約束を守ることなど、社会的なルールや道徳観を子どもに教える機会が増えてきます。今回はそんな私たちの価値観に深く影響を与えている儒教を題材とした作品をご紹介します。

この浮世絵は、有名な史実や故事などを同時代の題材に託して描く「見立絵」と呼ばれるものです。題材となっているのは、画面右上の枠内に描かれた、楊香という子どものお話。楊香が父親に襲い掛かろうとする虎に勇敢に立ち向かい、自分の命と引き換えに父親を助けてほしいと天に祈ると、虎はしっぽを巻いて逃げ出した、というこの古い中国の逸話は、儒教の徳目である「孝」（父母を敬愛する気持ちを持つこと）を伝えるものです。

しかしそんな勇敢で親孝行な

楊香も、浮世絵師の手にかかれば、鳥かごの鳥に襲い掛かろうとするトラネコに立ち向かうかわい子どもの姿に。母親の手には丸める途中のゴザがあり、足元には箱枕が転がっていますから、おそらくお昼寝から起きたところなのでしょう。また押し入れの中には畳まれた蚊帳も見えます。「だめだよ」とネコを退けている子どもの声が聞こえてきそうな、なんとも微笑ましい夏の情景です。

この絵は儒教の徳目を伝えることを目的として描かれたものではないかもしれません。しかしこのような逸話が日常生活の中に取り入れられることは、意図せずとも「親孝行」という価値観が社会の常識として認知される助けとなっていたことでしょう。

そんな目で、子どもたちが日々楽しみにしている絵本やアニメを見てみると、子どもに大切なことを教えてくれるコンテンツがたくさんあることに気がきます。時には肩の力を抜いて、テレビの中のキャラクターに子育てを手伝ってもらいませんか。

見立二十四孝之内 楊香

歌川貞虎 天保（1830-44）頃
二十四孝とは、中国において優れた孝行を行った24人のエピソードのこと。日本では御伽草子のひとつとしても広く知られており、江戸後期には浮世絵や芝居などの題材として取り上げられることも多かった。絵師は美人画から花鳥画まで幅広く手掛けた歌川貞虎。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

儒教は宗教なの？

儒教は孔子が説いた教えや後世における解釈を指す思想のことで、有名な『論語』はこの孔子の言葉がまとめられたものです。一般的に宗教とは、神様のような人間や自然の力を超越した存在への信仰に、未来の（ときに死後の）幸せを託すものです。一方、儒教はあくまでも人の価値観や成すべき行動を説くもので、大切なのは信仰ではなく、自分自身の日々の実践です。江戸時代、そんな儒教は基礎教養や行動規範として、身分を問わず広く学ばれていたのです。

ここで紹介した作品はウェブサイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」<https://www.kumon-ukiyo.jp>でもご覧いただけます。【文・写真提供●公文教育研究会】